

弓振日向遺跡

遺跡範囲確認調査報告書



1987.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が弓張日向遺跡

序

八ヶ岳の裾野に広がる、広大な台地には縄文時代の遺跡が星をちりばめた様に密集しています。かつてはまだ荒野であったであろうこの大地で太古の人々はどんな文化を持ち、どの様な生活をしていたのでしょうか。そんな太古に夢を馳せ、先人の営みを想像してみる事は、私達に大きな感動と喜びを与えてくれるものです。しかし、人類がまだ文字を持たなかった遠い過去の事実は記録としては残っていません。そこで私達は発掘調査によって得た物質的な資料をもとに人類の過去を究明するしか術がありません。この様にして眞実の歴史に触れ後世に継承していくことは私達に課せられた重大な責任でもあります。

このたび、発掘調査報告書を刊行することになりました弓振日向遺跡は、昭和61年度県営は場整備事業弓振地区の実施に先立ち諏訪地方事務所土地改良課の委託を受け、原村教育委員会が昭和60年度に遺跡範囲確認のための発掘調査を行ったものであります。

今回の発掘調査にあたり関係者各位には大変な御理解と御協力、御尽力を頂きました。

ここに深甚なる謝意を表し厚くお礼申しあげます。

昭和61年5月31日

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例　　言

1. 本報告は、「県営は場整備事業弓振地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柳沢に所在する弓振日向遺跡の範囲確認調査報告書である。
2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和60年11月20日から12月6日にかけて実施した。整理作業は12月7日から26日まで行った。
3. 執筆は、平出一治と日達厚が話し合いのもとに行い、図面の作成・トレース・写真撮影・編集は平出が行った。
4. 発掘調査から報告書作成に至る過程で、太田喜幸・武藤雄六・小林公明の諸氏から御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。
5. 本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。なお、本調査関係の資料には、原村遺跡番号である78の数字を表記した。

目　　次

序

例　　言

目　　次

I 調査に至る動機と経過.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	3
III 調査の方法と経過.....	3
IV 調査の概要.....	6
V 遺構と遺物.....	7
1 遺構の検出状況	
2 遺物の分布範囲	
3 遺物	
VI ま　と　め.....	10
発掘調査団名簿	

I 調査に至る動機と経過

原村教育委員会では、県営は場整備事業弓振地区内における遺跡分布調査を、昭和59年10月13日に実施し、弓振日向地籍で縄文時代中期の土器破片と石器を採集した。

その結果は、昭和60年9月6日に行われた長野県教育委員会の「昭和61年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」において協議された。

分布調査の結果だけでは資料不足のこともあり、遺跡の性格をはじめその範囲等については不明瞭な点が多く、適切な結論を導きだすことができなかったため、早急に遺跡の範囲を明確にすることが課題として残された。出席者は長野県教育委員会文化課、南信土地改良事務所、原村役場農林課、原村教育委員会の4者であった。

その後、遺物の散布地域を弓振日向遺跡（原村遺跡番号78）と呼ぶことにし、昭和60年度内に遺跡範囲確認調査を実施すべき検討をおこない、地元に対する説明と協議を進め、11月20日から12月6日にわたり緊急範囲確認調査を実施した。



第1図 弓振日向遺跡遠景

表1 弓振日向遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	撋文				弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晚					
1	家裏	○			○				○				昭和59年発掘調査
2	大久保前									○			消滅
3	向尾根	○	○		○								昭和54年発掘調査
4	横道下				○					○	○		昭和54年発掘調査
5	柳沢				○	○							地点不明
6	前尾根						○						地点不明
7	前沢				○								
16	恩賜南								○				
23	恩賜西				○								
24	恩賜		○	○	○				○				
78	弓振日向				○	○							昭和60年発掘調査（遺跡確認）



第2図 弓振日向遺跡の位置と付近の遺跡（1:20,000）

II 遺跡の位置と環境

弓振日向遺跡は、八ヶ岳西麓の諏訪郡原村柳沢にあって、八ヶ岳から流下する弓振川と前沢川によって北と南を浸蝕された、東西に細長い尾根上に立地する。遺跡が所在する付近では尾根幅は最も広く、130m位を測る。標高は1030m前後を測り、当地方の縄文時代中期の遺跡としてはやや高所に位置しているようである。

地図は、普通畳である。すでに遺跡の西側近くまで宅地化が進んできているわりには、遺跡の保存状態は良いようである。

八ヶ岳西南麓一帯の尾根には、縄文時代を中心とする数多くの遺跡が埋蔵されている。この弓振日向遺跡の周辺にも大小様々な遺跡が分布している。その分布状況は第2図および表1に示したとおりである。

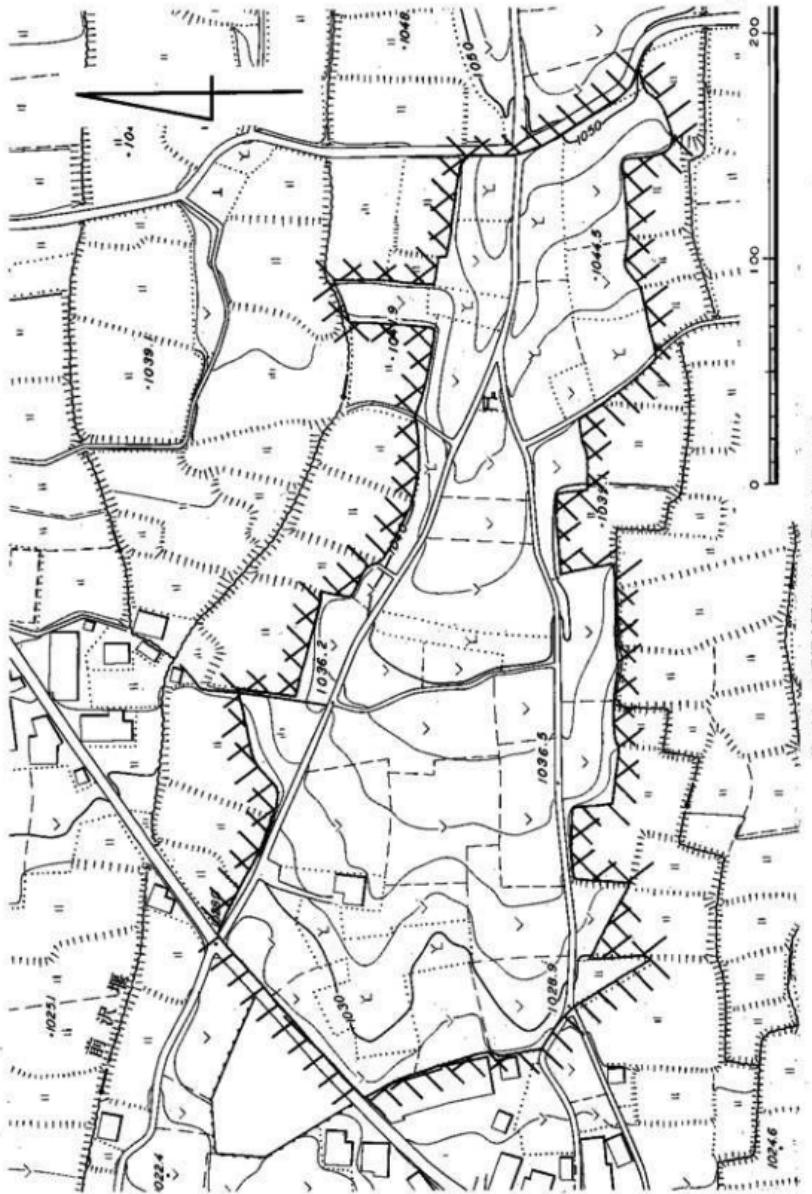
それらの中で、すでに発掘調査が実施されたことのある遺跡には、第2図1の家裏遺跡、3の向尾根遺跡、4の横道下遺跡がある。向尾根遺跡は村内で旧石器時代の遺跡としては最初に調査されたこともあり注目されているし、家裏遺跡は縄文時代中期後半の数多い住居址が発見されたことで注目されている。

III 調査の方法と経過

本調査の対象地域は、昭和61年度県営整備事業予定地域内の畠地で、それは弓振尾根のはば全域におよぶ（第3図）。調査方法と目的は、 2×2 mのグリッド平面発掘を実施し、遺物の散布範囲と遺構の埋没状況を把握することとした。

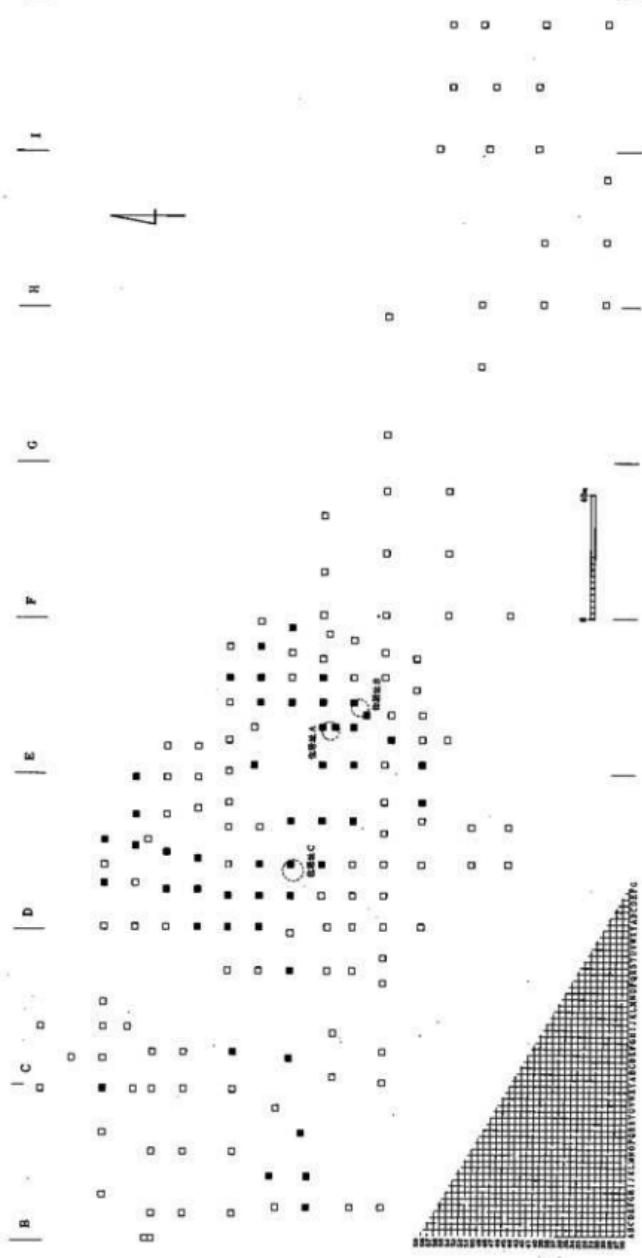
発掘に先立ち、昭和61年度に実施予定の緊急発掘調査を考慮する中で、東西南北に軸を合せたグリッドを設定したが、東西方向には50mの大地区を設け、西からB区・C区・D区というようにI区までアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに 2×2 mの小地区（グリッド）に分け、東西方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南北方向は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振分けた（第4図）。

発掘調査は、昭和60年11月20日から準備をはじめ、25日に教育長の挨拶のあと、I地区からグリッドの平面発掘を実施した。27日には住居址と思われる落込みを確認し、その後もあまり多くはないが住居址を確認することができた。12月6日には全てのグリッドを埋めもどし、調査を完了することができた。



第3圖 前沢附近区域圖・地形図 (1 : 2,500)

第4図 試掘グリッド配置図 (■は遺物出土グリッド)



発掘は原則として、ソフトローム上面まで行い、住居址と思われる落込みは、確認面までの調査とした。なお、発掘グリッドは、作物および遺物の出土状態によって密になるところと、そうでないところはあるが、目的の一つである遺物の散布範囲については、ほぼ把握できたものと思っている。

IV 調査の概要

本調査は、試掘グリッド配置図（第4図）に示したように、169グリッド672m²の平面発掘調査を実施し、46グリッドから縄文時代中期の土器破片と石器を発見した。

本遺跡における層序は、耕作土の直下がローム層となってしまう極めて浅いグリッドもみられたが、基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層 黒褐色土層 煙の耕作土層。僅かではあるが、深度の深い古い耕作土が認められるグリッドもある。



第5図 発掘風景

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。

発見した遺物の多くは、この土層の上半分からの出土である。

第III層 ローム漸移層

第IV層 ソフトローム層

本調査の主たる目的は遺跡の範囲確認であるため、遺構と思われる落込みは確認時点で調査を打ち切り、それ以下の掘り下げはしていない。また、制約された $2 \times 2\text{ m}$ という範囲内の調査ということもあり、明確なことはいえないが、住居址と思われる落込みA～Cの3箇所(第4図)と、小窓穴1を検出している。

遺物は、B・C・D・Eの4地区で発見したが、B・C地区は窪地からの発見である。これは、その出土状態から東のD・E地区から流れ出したものと考えられる。

D・E地区は住居址と思われる落込みが検出できた地域であるが、遺物の発見は少ない。

発見資料が少なく、本調査だけで遺跡の性格までは言及できない。

V 遺構と遺物

1 遺構の検出状況

遺構は検出時点で調査を打ち切っているため、明確なことは一切不明であるが、検出時点における若干の説明を加えてみたい。なお、住居址についてはA・B・Cの仮名称を用いた。

(1) 住居址A

EH-75グリッドでローム層に黒色土の落込みを確認した。しかし、ロームは不安定な状態であり、ロームマウンド状の遺構とも思われた。EH-73グリッドの調査を実施してみたところ、やはりロームに黒色土の落込みが認められた。その規模および黒色土(埋土)のありかたから、円形を呈する窓穴住居址の埋没が推定できる状態であった。

発見した遺物は、EH-75グリッドで土器破片1点と黒曜石1点、EH-73グリッドでは土器破片21点と黒曜石12点を発見した。適確な資料を持ち合せていないので感じたままを述べると、当地方における他遺跡での住居址検出時に比べて遺物は少ないようだ。しかし、本調査においては発見遺物数は多い方である。

(2) 住居址B

EL-70グリッドでロームに黒色土の落込みを確認し、EJ-68グリッドでロームに炭化物混入の黒色土の落込みが確認できた(第5図)。埋土に違いがみられたが、その規模から円形を呈する窓穴住居址の存在が推定できた。なお、EJ-68グリッドで柱状の自然石1点を発見している。本調査で石の発見は極めて少ないので、住居址に伴うものと考えられる。

遺物は少なく、EL-70グリッドで土器破片7点、黒曜石3点、水成岩の剥片2点を発見ただけである。

(3) 住居址C

DK-80グリッドで検出した。出土遺物が土器破片1点と極めて少なかったこともあり、確認が遅くなってしまった。結果的には、住居址を 2×2 mの範囲で平面発掘したことになる。グリッドの北壁土層図(第7図)でみると、三角堆土、逆三角堆土の発達が認められる。

(4) 小堅穴

EP-85グリッドで楕円形の落込みをローム面で認めた。埋土はローム小粒混入の黒色土である。遺物の発見はない。

2 遺物の分布範囲

当地方の縄文時代中期の遺跡としては、その調査面積の割に発見した遺物数は少ないよう思う。これは本遺跡の性格の一端を物語っていることにもなろう。

発見した遺物の総数は393点を数え、内訳は土器破片304点、石器87点(原石・剥片等を含む)、土製品2点である。



第6図 EJ-68グリッド住居址Bの検出状況

遺物はB・C・D・Eの4地区から出土したが、尾根の南斜面では1点も発見できなかったのに、北斜面では少ないながらも発見できた。比較的遺物の多かったDK-75・DR-75・DR-80・EH-73グリッドは、尾根のほぼ中央平坦部にあたる。これは住居址の検出地点と一致していることになる。したがって、この辺りが遺跡の中心となろう。

B・C地区は、窪地からの発見であり、東のD・E地区から流れてきたものと考えられる状態で、当時の人たちの主たる生活区域とはその性格が違うようである。

以上のことから弓振日向遺跡は、尾根上の平坦部から北斜面におよぶ径110m位の範囲に広がっているものと思われる（第8図）。

3 遺 物

昭和61年度に予定している県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査を考慮した遺跡範囲確認調査ということで、発見した土器と石器については、基礎整理をしただけで分析をするまでには至っていない。したがってここでは、主なものに簡単な説明を加えるにとどめておきたい。

（1）土器

発見した土器を大別すると次の二時期に分けることができる。

縄文時代中期中葉

本遺跡の中心となる時期の土器である。（第9図・第10図）。新道式から藤内I式の要素を持つものである。有孔鋤付土器の破片もみられる。

縄文時代中期末葉

発見数は少ないが、浅い沈線が施された曾利IV式土器（第10図下の左）と、大柄な沈線によって縄文帯と無文帯に分ける手法を用いた中期最末ないしは後期初頭に位置付けられるものがある（第10図下の右）。

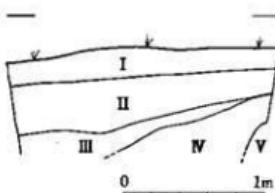
（2）土製品

土器片使用の円板2点で、遺物整理の折に認められた。新道式土器を円形に打ち割ったものである。DK-75グリッド出土（第11図上の左）。

（3）石器

石器の総数は87点（原石・剥片等を含む）である。いわゆる定形石器は、石鎌3点、打製石斧8点、石匙1点、凹石4点、磨石1点である（第11図）。これらの石器は、当地方の縄文時代中期の遺跡から発見されるものと取り立てて違う点はみられない。

第7図 DK-80グリッド（住居址C）
北壁土層図（1:40）



- I 黒褐色土層
- II 黒色土層
- III ローム粒混入黒色土層
- IV ローム粒混入褐色土層
- V ローム層

VI まとめ

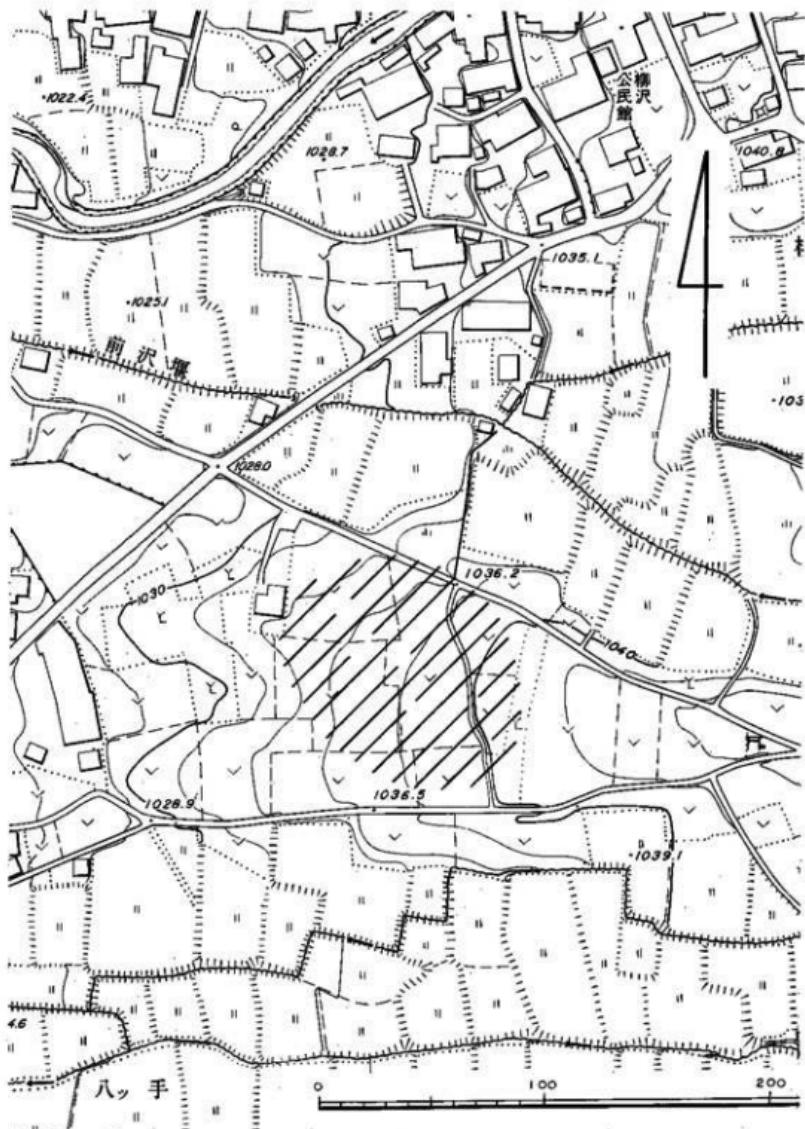
今回の発掘は、遺跡の範囲確認に重点をおき、遺構の精査は昭和61年度調査とした。また、遺物についても、昭和61年度調査後に本格的な整理作業を考えているため、本遺跡の性格を述べるまでには至っていない。

しかし、住居址と考えられる落込みの発見は、縄文時代中期中葉期における集落跡の存在が把握できたことになり、昭和61年度における発掘調査の目標が得られたことになろう。

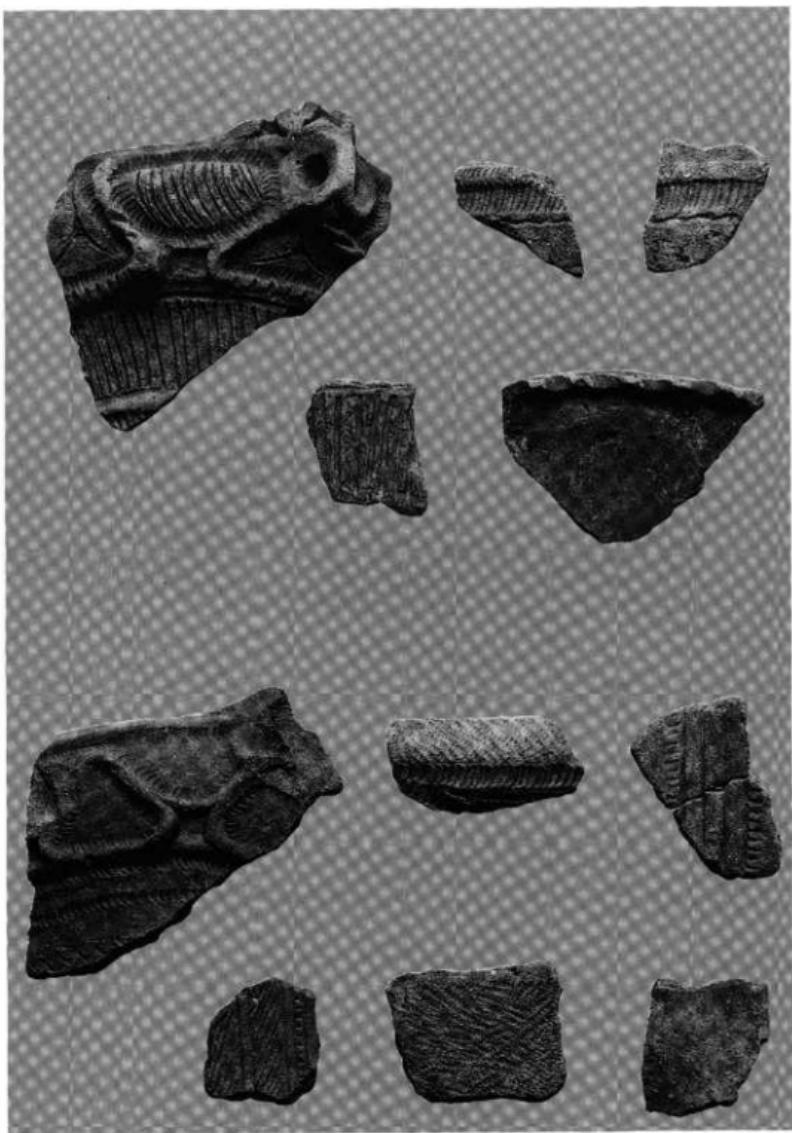
最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

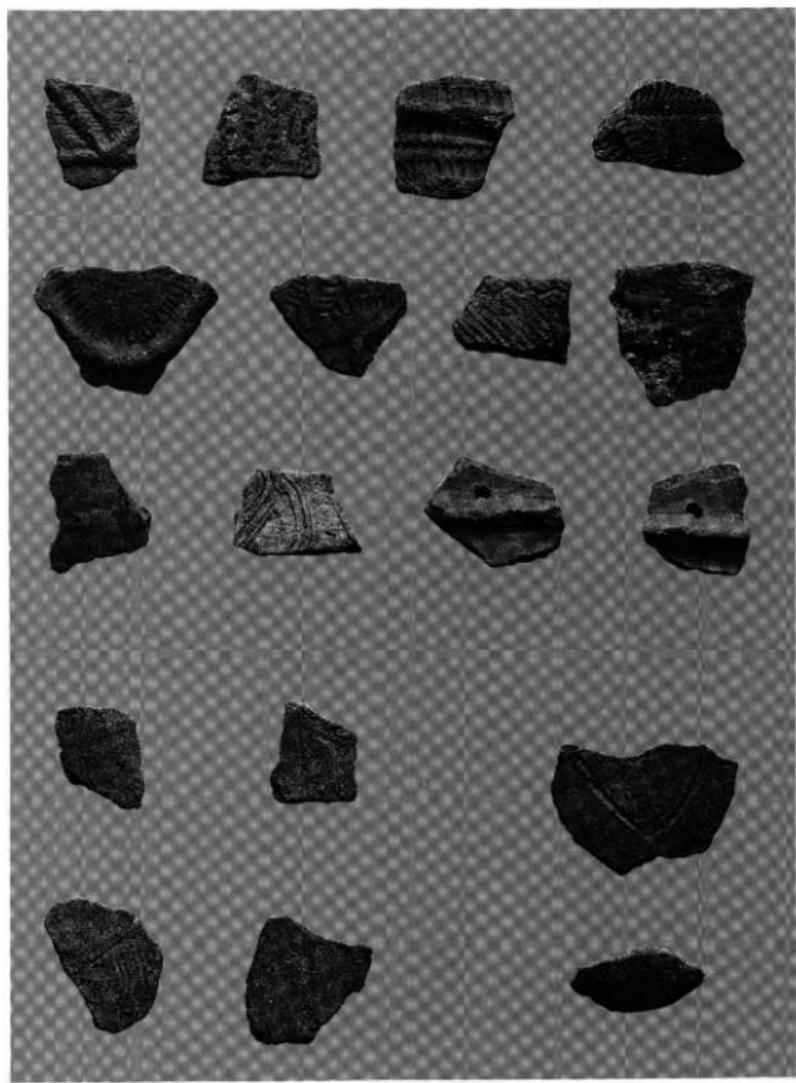
- 1980. 03 長野県教育委員会 『昭和48年度八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985. 07 原村役場 『原村誌 上巻』
- 1985. 11 原村教育委員会 『長野県原村遺跡地名表』



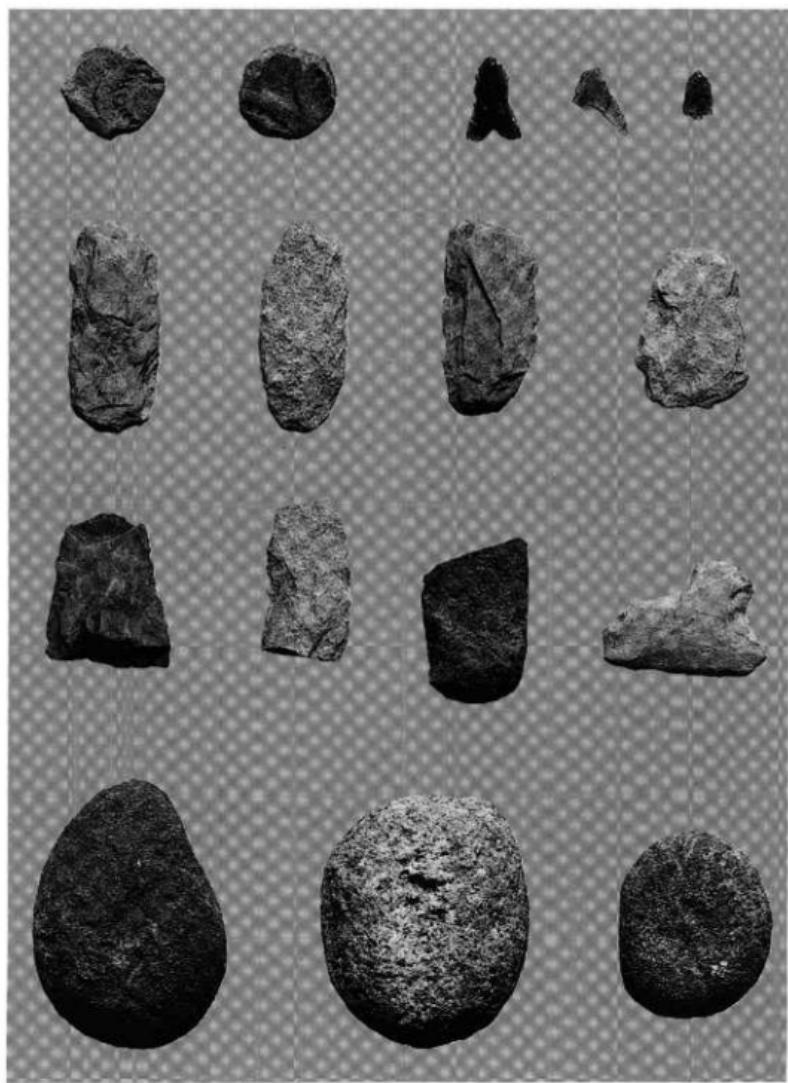
第8図 弓振日向遺跡の範囲概念図 (1:2,500) (||||| 遺跡範囲)



第9図 土器（1） DR-75グリッド出土
DR-80グリッド出土



第10図 土器（2）



第11図 土製品と石器

発掘調査団名簿

団長 平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出一治（原村教育委員会）

調査員 日達 厚（原村教育委員会）

調査補助員 平林とし美

調査参加者 宮坂とし子 野原秀人 菊地利光 今泉かめ子 中村よしの 中村ふさゑ 鎌倉たけみ
小池一二三 五味かずゑ 鎌倉長重 小林横子 清水京子 牛山ふさし 日達いち子 五
味としゑ 武田まつ江 柳沢永子 真道ふき

整理参加者 平林とし美 柳沢永子（順不同）

事務局 原村教育委員会事務局一行田竹輝（教育次長） 武田伊都子（指導主事） 迂見茂子 佐貫正
憲

原村の埋蔵文化財 4

弓 振 日 向 遺 跡

遺跡範囲確認調査報告書

発行日 昭和61年5月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 ほおづき書籍株式会社

